



Japan - Myanmar Lacquer Craft Exchange Research Program

Asian Lacquer Craft Exchange Research Project

Office: Matsushima Lab. Faculty of Education, Utsunomiya University
350 Mine, Utsunomiya, Tochigi, Japan
phone: 81-28-6495361, fax: 81-28-6495361, e-mail: info@asian-urushi.com

2014年7月3日

日・ミャンマー外交関係樹立60周年記念 アジア漆工芸学術支援事業 第10回ミャンマーバガンにおける漆文化交流の開催

アジア漆工芸学術支援事業は、ミャンマーを中心に、漆工芸の現状調査をはじめとする調査研究活動と、漆器産地における漆工芸教育支援交流活動を通し、日本とアジアの相互理解を深め、漆工芸の発展を目指す目的で、ミャンマー協会からの委託研究事業として2002年(平成14年)にスタートしました。委託期間終了後も現在に至るまで活動を継続しています。

2014年、ミャンマーでの漆工芸教育支援交流活動が10回目を迎えるにあたり、漆工芸に携わる人々のみならず、対象を広げ一般の人々に対し、講演・レクチャー及び交流作品展示、公開ワークショップを通して、漆工芸の可能性・素晴らしさを伝え、さらなる理解と交流を深め日本とミャンマー、東南アジアの漆文化の発展に貢献したいと考えています。

日時：2014年9月10日～13日の4日間

場所：Lacquerware Technology College (Old Bagan) 講堂、展示スペース、ワークルーム

**対象：Lacquerware Technology College 教員・学生、バガン漆器組合員、漆器業者、漆芸技術者
一般の方々の参加・参観も歓迎です。**

内容：1-講演・レクチャー、2-ワークショップ、3-交流展示

主催：アジア漆工芸学術支援事業、Lacquerware Technology College

助成：公益財団法人 東芝国際交流財団、公益財団法人 美術工芸振興佐藤基金

後援：在ミャンマー日本国大使館、Small Scale Industries Department, Ministry of Co-Operatives

1-講演・レクチャー 9月11日～12日 9:00～12:00 Lacquerware Technology College 講堂 ★入場無料

- ・記念講演「日本の漆-乾漆造形の形と色」増村紀一郎氏(東京藝術大学名誉教授・重要無形文化財保持者 髹漆)
 - ・講演「漆-もてなしかたのデザイン」尾登誠一氏(東京藝術大学教授)
 - ・「ミャンマーでの10回にわたる漆を通じた交流活動の変遷」松島さくら子(代表)
 - ・「京都の漆工」栗本夏樹(京都市立芸術大学教授)／井上絵美子(京都市立芸術大学講師)
 - ・「日本の藍胎と蒔髹」高橋香葉(漆芸家)
 - ・「日本の美術館より～漆を通じた活動」秋間敬代(石洞美術館学芸員)／寺尾藍子(石川県輪島漆芸美術館学芸員)
 - ・「カンボジア漆復興の軌跡」Eric Stocker (カンボジア在住 フランス人漆芸家)
 - ・ミャンマーの漆工芸を紹介するレクチャー (3名のミャンマー人技術者・研究者予定)
- (上記 講演題名は仮題)

2-ワークショップ 9月12・13日 9:00～12:00 Lacquerware Technology College 講堂・ワークスペース

- ・日本とミャンマーの漆工芸技術に関するワークショップ (★要事前登録)

3-交流展示 9月10日～13日 9:00～16:00 Lacquerware Technology College 講堂・展示スペース ★入場無料

- ・ミャンマー及び日本の代表参加作家の作品による交流展
“Japan-Myanmar Lacquer Art Exhibition” Commemorating 60 Years Friendship and 10 Years Exchange Program”
日本・ミャンマーの漆芸作品約40点を一堂に展示
- ・9月11日 14:00～参加作家によるアーティストトーク、レセプション開催

お問合せ

アジア漆工芸学術支援事業 代表: 松島さくら子

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町 350 宇都宮大学教育学部工芸研究室内

tel: 028-649-5361/090-9837-7922 URL: <http://asian-urushi.com> e-mail: info@asian-urushi.com

漆って何？ What is urushi ?

漆について少々ご紹介いたします。漆は、ウルシ科に属する樹の幹に傷をつけて出てくる樹液のことです。漆の樹は主に日本・韓国・中国・ベトナム・タイ・ミャンマー・ブータンなどの東アジアから東南アジアにかけて分布しています。日本や中国ではウルシ属のウルシノキ、ベトナムではアンナンウルシ、タイやミャンマーにはビルマウルシ属の樹があり、その樹液を塗布したものが漆工芸です。

漆塗りを施した漆器には、日本では、蒔絵・螺鈿・沈金・平文・蒟醬・漆絵・箔絵・卵殻などの加飾が施されます。東南アジアの各地では、漆絵・箔絵・蒟醬・卵殻などが多く見られます。漆は、塗料としてだけでなく、型に布を貼付けて成形する乾漆技法として、また接着剤として金属粉や貝などを貼付けたりすることで、様々な加飾表現が可能です。

ミャンマー語でミャンマー漆のことをティスイ (thit-si) といいます。Melanhorrea usitata (Glute usitataともいう) という木の樹液です。ウルシ科ビルマウルシ属で、日本ではビルマウルシと呼ばれています。タイ北西部からミャンマーのシャン州にかけての標高1000メートルくらいのところに多く分布する他、ザガイン管区、パゴー管区、マンガレー管区、さらにカヤー州、カイン州、カチン州など広域にわたっています。主成分はチチオールで水分・ゴム質含窒素物からなり、ラッカーゼ (酵素) の働きにより空気中の酸素と酸化重合して乾燥します。乾燥には一定の湿度が必要となる。数日から1週間かかる場合があります。いったん乾燥すれば丈夫で艶のある塗面をつくれます。

ミャンマーにおいて漆器は「ユン (yun)」と呼ばれています。産品は、キンマ (コショウ科の植物の葉にピンロウジの種子や石灰を包んで嘔む嗜好品) を入れる筒型の入れ物 (kun it) 、発酵茶を入れるしきり付きの入れ物 (lahpet-ok) 、お供物用器 (hsun-osk) 、箱、皿、碗、盆などの器が多く、キャビネットや机などの大型の漆器も作られています。素地は、竹を編んだり捲いて成形し、下地及び塗りを施したものがほとんどで、馬の尻尾の毛を編んだ馬毛胎漆器や木製漆器もあります。加飾は、黒・朱などの漆を塗った面に、刃物で細かな彫り傷をつけていき、色漆や顔料をその傷の中に埋め込んで文様を表現する蒟醬技法 (ka nyit) が多く使われています。金箔で文様を表す技法 (shwe-zawa) 、漆と骨粉や靱殻灰などを混ぜたものをレリーフ状に盛り上げる技法 (thayoe) 、過去の日本との交流から作られるようになったと言われている変わり塗り、卵の殻を塗面に貼付ける卵殻技法や、近年では黒漆の上に朱漆を重ねて塗り、研ぎだして下の黒漆を見せる根来塗り風の器も制作されています。



ミャンマーの漆の木



ミャンマーの代表的な漆器
蒟醬、箔絵などの装飾が特徴



重要無形文化財保持者 髹漆 増村紀一郎氏作品 (交流展出品作品)



松本達弥氏作品 (交流展出品作品)

ミャンマーバガンにおける漆ワークショップ・レクチャーの様子 (2008-2013)



2008年4月 漆芸家 松本達弥氏による日本とミャンマーの蒟醬技法の比較、日本の蒟醬刀を見せながら実技公開をおこなった。蒟醬技法はかつて、タイやミャンマーから日本に伝わり、日本では独自の表現に発展した技法である。



2009年3月漆芸家 鳥毛清氏による日本の沈金技法の紹介と、ミャンマーの蒟醬技法の彫りの比較を行なった。参加したミャンマー人技術者らは、沈金技法に初挑戦した。



2010年8月 小林伸好氏(東北芸術大学教授)による変わり塗りの仕掛け作業の様子。ミャンマーにもかつて日本から伝わったJapan-yun と呼ばれる同技法が定尺しているが、



2011年8月 京都産業技術研究所の大藪泰氏による、漆の硬化のメカニズムについて講義を行なった。漆液の化学的見地からの分析や研究について語った。



2012年8月 藤田敏彰氏による、日本の漆工品の修理に関する取組みを紹介し修復実演を行なった。ミャンマーでは、漆工品の修復の概念や修復方法が確立していないことから、これを機に、ミャンマーでの修復方法の検証が進む事をのぞむ。



2013年8月 ベトナム在住の漆画家 安藤彩英子氏によるベトナム漆ワークショップの様子。この他、タイチェンマイ大学の Sumanatsya Voharn 氏にもタイ漆芸の現状についてのレクチャーをいただき、ASEAN 近隣国の漆を通じた交流も行なわれた。